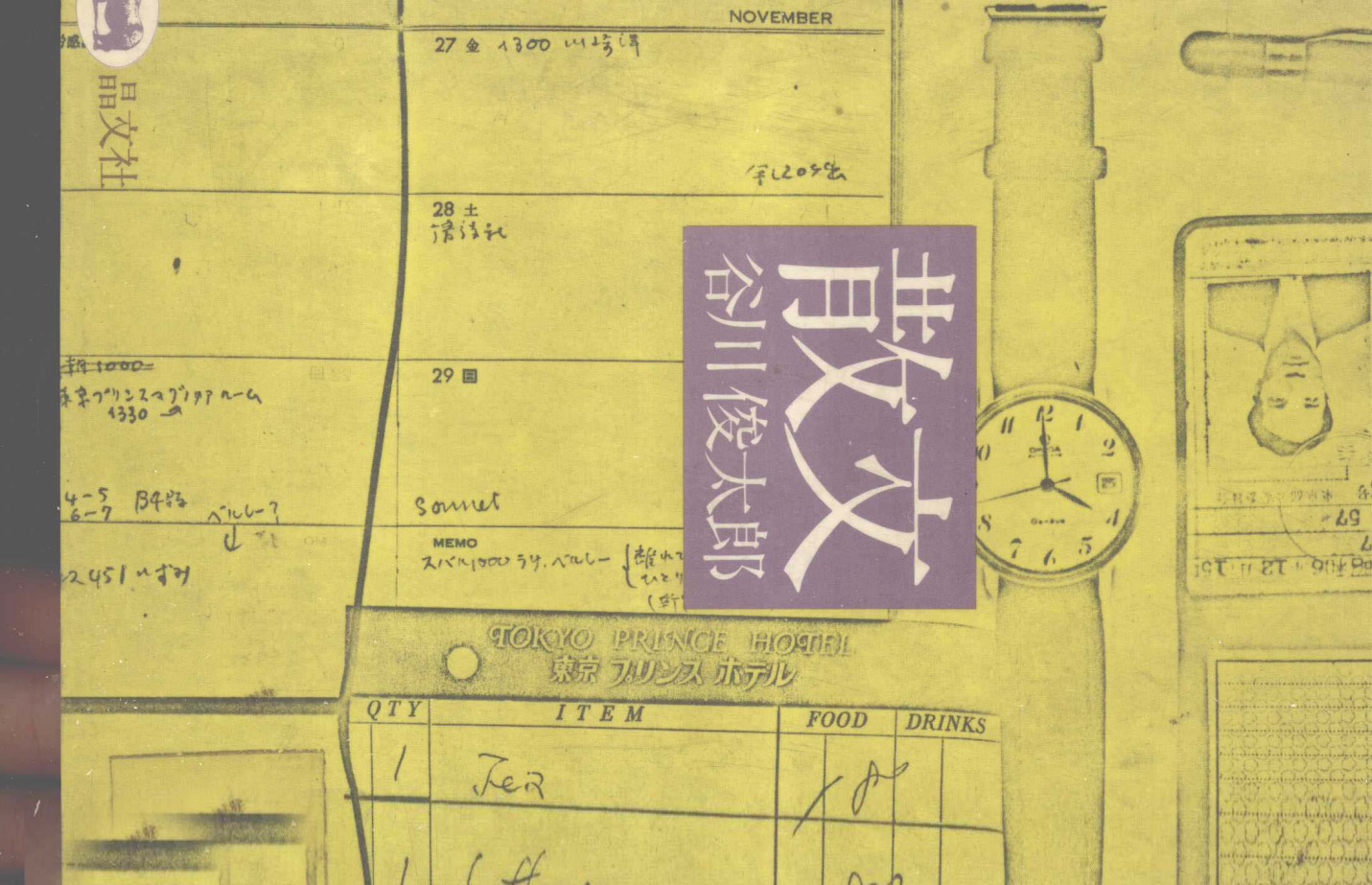
散文

谷川俊太郎


NOVEMBER
27 金 1300 川崎
28 土
29 日
Sonnet
MEMO
TOKYO PRINCE HOTEL
東京プリンスホテル
QTY
ITEM
FOOD
DRINKS

著者について
谷川俊太郎（たにかわ・しゅんたろう）
一九三一年東京生れ。詩人。
詩集―『二十億光年の孤独』『六十二のソネット』『愛について』『あなたに』（創元社）『21』『谷川俊太郎詩集』（思潮社）『落首九十九』（朝日新聞社）『うつむく青年』（山梨シルクセンター）ほか。詩論集―『世界へ―』（弘文堂）童話―『けんはへっちゃら』『しのはきよろきよろ』（あかね書房）『ワッハワッハハイのぼうけん』（講談社）ほか。他にうた、絵本、シナリオなどがある。

散文
一九七二年一一月二五日初版
一九七三年二月一〇日三刷
著者谷川俊太郎
発行者中村勝哉
発行所株式会社晶文社
東京都千代田区外神田二―一―一二
電話東京二五五局四五〇一（代表）・四五〇二（編集）
振替東京六二七九九
堀内印刷・美行製本
ブックデザイン・平野甲賀
© 1972 Shuntaro Tanikawa
〈検印廃止〉 落丁・乱丁本はお取替えいたします

散文

谷川俊太郎

晶文社

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.c

散文　目次

旅

出会い 10　ニューヨークからの手紙 39　橋をかけろ、トンネルを掘れ！ 49　道三態 57
ぶらりドライブ 61　自動車から馬へ 64　一九七二東京 67

季節

春の臨終 70　五月の空 73　五月に 76　五月の海 79　梅雨の季節 80　テーブルの上に…… 82　室内について 85　青空 88　私の海 89　永遠 94　三好さん 96
不思議な力 99　昨日今日など 101

聴く

音楽のとびら 114　〈好き〉から〈愛〉へ 117　ピアノを開く時 127　耳で聞く詩 130　或る苦痛について 133　立ちばなし 137

見る

クローズアップ 146　見知らぬ人間 148　静けさ 149　私のマリリン・モンロー 152　ツタンカーメンの黄金のマスク 154　ピカソを所有する権利 157　ガラスのむこう 161　何かしている 163　競技者のイメージ 165　ＬＳＤリポート 167　青い映画と無邪気 170　フェルメールへの渇き 174　暗闇の中の地球 180

思う

最も大切なもの 186　どうしてもほしいもの 188　思いつめる 191　おそろしい 194　チャーリーブラウンの世界 198　太平洋の小さなヨット 203　漂流者たち 206　教育について 208　本について 212　友情について 216　カネについて 218　後悔について 221　忙しいですか 224　おさな友だち 226　ひとりっ子 228　自分自身への注文 233　前提として 237

言葉

発語の根はどこにあるのか　244
仮に勘と呼ぶ曖昧なものについて　251
「何ひとつ書く事はない」と書けるということ　258
〈公〉という一文字に発する断想　265
詩の現場がどこかにあるはずだ　271
自問自答　278
あとがき　286

旅

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

出会い

金の事など

何の代償も期待されず、只で金を貰うのは、親の脛をかじっていた頃以来の事である。誰もが平気で貰っているフェローシップというものを、私も最初は何となく貰っても当然という風に考えていた。けれどもいざ貰ってみてしかも何の義務も無いと知ってみると、貧乏国日本の一市民としては、いささかうす気味わるかった。見えぬひもを警戒するなどという下司のかんぐりではない。そういう金を貰って自分がどうなるのか怪しんだだけである。

私に与えられた金は、フォード財団からジャパン・ソサエティに出された金の一部であるという。という事はもちろんアメリカ合衆国の金である。日本人である私がアメリカ合衆国の金で、アメリカ合衆国だけでなく、ヨーロッパにまでやらして貰うのは、少々おかしい。おかしいけれどもアメリカ合衆国から金を貰うというのは、当節の世界的流行であって文学の世界に限らない。学問の世界では、アメリカの軍隊から金を貰っていたというので最近問題になった。

軍隊だからと言って、それだけを責めるのも妙なものである。その金で直接軍事的な研究でもするのならともかく、軍隊から出ようが、財団から出ようが、アメリカの金である事に変りはない筈だ。

学問や芸術の世界に国境は無いなどと高級な事を言ってごまかすのもひとつの手だが、残念ながらそれは嘘である。各国政府が現に存在し、国家が各々のエゴイズムをもってしのぎをけずっていれば、それに巻きこまれずにいるのは難事である。

けれども、私の場合にはそこまで大げさに考えるのもまたこっけいであった。これこれのフェローシップがあるが受ける気はあるかと問われ、受けると答えた以上、何を考えようと弁解じみる。もしかすると、弁解じみた事を考えるのすら調子はずれかもしれない。金は金、どうせ天下の廻りもの、それがどこの金だって、誰の金だってかまわないではないか、要は自分を崩さぬ事だ、呑気ながらそういう結論で私は旅立ち、事実スポンサーを意識した事は、八ヵ月余の旅行中数えるほどしか無かった。

そのうちの最も切実なひとつは、エール大学でバトラー教授に昼食を御馳走になった時の事で、百数十年前に建てられたとかいう、ファカルティのための質素な食堂で、バトラー教授は上手な日本語でこう言われた。

「日本の方を御案内するのは、今週、あなたで四人目です。みんな何かの形で、アメリカからお金を貰ってこちらへいらしたのです。いろいろなかたにアメリカを知っていただくのは、私共としても大変嬉しい。しかし、それがいつも一方的なのは残念です。心から日本を愛し日本に関する学問に打ちこんでいる私共のような人間を日本はどうして日本にやってくれないのでしょう」

その口調に皮肉の影がいささかも無く、むしろ哀しみと静かな怒りがあっただけに、私は参った。愚痴まじりに日本は貧乏だからとか、政治家の意識が低いからなどと責任逃れをする事の出来ぬ程、

その口調は真剣だったのである。恥ずかしかった。

恥ずかしかったが、それは後めたさにつながりはしなかった。何の代償も期待されぬとはいえ、私に金を出すのは、むこうにもそれだけの必要があるからである。私がヨーロッパやアメリカ合衆国を旅してみたいと欲していると同程度に、むこうも私を欲しているのだ、何故かは知らないがそうなのだ、文化交流という少々抽象的な大義名分のかげに、私はアメリカ合衆国という国の、欲望を感じた。アメリカは貪婪である、金持であるからこそそうなのだ。その貪婪の背後に淋しさとでもいうべきものもまたかくされているのだが。その貪婪に性急に応える事は私には出来かねた。私は先ずアメリカを知り、たとえ少しでもアメリカを経験したかった。私は受けるだけで手一杯で、とうてい与える余裕は無かった。文化交流は、私が日本へ帰ってから始まるべきだと思うと、苦しまぎれに私はジャパン・ソサエティのヒュー・ボートン氏に話し、幸いに氏もそれに賛意を表された。

だから私の今度の旅行は、要約すれば休暇の一語に尽きる。仕事からの休暇だけでなく、日本からの休暇であり生活からの休暇であり、要するに私は子どものように、しばらく人生からおりていた。只の金を使うには、それが私に一番ふさわしかったし、その休暇は私が長年の間もちたいと思い、また時にはもたねばならぬと思いながら果せなかった事であった。他力に頼ったのは口惜しいが、それだけに感謝の念も深い。

旅行中私は子ども二人を残した留守宅の生活費のために生れて初めての翻訳を少々やった外は、徹底して何もしなかった。詩一行書かなかった。考える事も余りしなかった。以下の文章も、帰国後とりとめなく心に浮ぶ考えや感想を、それをつきつめて結論するだけの経験は無いから、ただそのまま

に述べるに過ぎない。

フェルメール

初めてフェルメールを見たのは、アムステルダムの国立美術館においてであった。『小さな通り』と呼ばれている作品である。そこに所蔵されているフェルメールの三つの作品、『女中』、『青衣の女』、『恋文』のかかっていた壁には、タイプで打った小さなノートが貼られていて、それらが展覧会のためにハーグに行っている事を示していた。だがそれらの作品は、二ヵ月後パリで見る事が出来た。〈フェルメールの光に〉と題された展覧会に、ヨーロッパのフェルメールのほとんどが集まっていたのである。すでに旅程に迫られていた私にとって、これは幸運以外の何ものでもなかった。

そこで見た十数点に、アメリカに行ってからワシントンのナショナル・ギャラリー、ニューヨークのメトロポリタン美術館とフリック・コレクションで見た十数点を加えると、私は現存するフェルメールの作品の大部分を見た事になると思う。こういう言いかたをすると、初めからフェルメールを見る事を旅のひとつの目的にしていたかのようだが、それは違う。フェルメールを見たいと思い始めたのは、私が実際にアムステルダムで、フェルメールを（ただ一点だけではあるけれど）、この眼で見てからである。名前は知っていたし、有名な『ターバンの女』の複製は記憶に残っていた。だが私がほんとうにフェルメールを見たのは、その本物を見た時である。本物を見たから、フェルメールが見たくなったのだし、旅に出ずに複製しか見る機会が無かったら、もしかすると一生私はフェルメール

に気ずかなかったかもしれない。

現代の進歩した印刷技術は、複製と本物との差をだんだんに小さなものにしてゆきつつある。複製で見ても本物で見てもそんなに変りは無いという絵画もあるだろう。複製を見る事が、本物を見る事につながる絵画もあるだろう。だがフェルメールは違う。複製と本物との間に、越え難い断絶がある。あたかもヴィニールの花と、野の自然の花とのように。或いはこう言いかえてもいいかもしれない。本物を見ても、複製を見たのと同じ感動しかなければ、私はその絵に本当に感動してはいないのだと。そういう形で感動した絵は実は私にはまことに少いのだが。

初めて見たフェルメールに感じた気持を、その時の状態のままに言葉にするとしたら、それは「ああきれいだなあ、ほんとになんてきれいなんだろう」という事にしかならない。美は人を沈黙させるという。その通りである。その沈黙の中に、無数の言葉にならぬ言葉がひしめいているのではないかと言う人もあるが、少なくとも私の場合、そう言えば嘘になる。沈黙はもっと深く、言葉にならぬ言葉などという不純なものは無い。しんとした、純正の沈黙なのである。

言葉はずっとあとになってから、やっと重い腰をあげる。その時でも言葉は謙虚だ、ただ一番ふさわしいオマージュを捧げ、絵の美しさにほんの少しでもあやかりたいと思うだけなのだ。

本物を見るとは恐しい事だ。何故ともなく私はそう思った。本物のもつこの輝くようなプレザンス、それは一体どこから来るのだろう。絵の中のプレザンスを言うのではない。一枚の絵がここに在る、そのプレザンスを言うのだ。これに出会うだけで、旅に出た甲斐があると私は思った。未知の土地に来たのに、場所にも人間にも現実感が無く、夢の中を歩いていたかのような旅の私に、フェルメール

は疑い難いひとつの鞏固な現実として目前に在った。

マルセル・プルーストの『囚われの女』の中に次のような文章がある。少し長いが引用してみる。

「彼（ベルゴット）が死んだときの状況は次のとおりである。軽い尿毒症の発作のために、彼は安静を命ぜられていた。ところが某批評家がフェルメールの『デルフト風景』（オランダ展のためにハーグの美術館から貸与されたもの）、彼の大好きな、そして隅々まで知っているはずのこの『デルフト風景』のなかに、黄色い小さな壁（それが彼には思い出せなかった）が実にみごとに描かれており、それだけをじっと眺めるとすばらしいシナの美術品のように自足した美を備えていると書いていたので、ベルゴットはじゃが芋を少し食べてから外出して、この展覧会場に入った。階段を数段上った途端に彼は目まいに襲われた。彼は多くの絵の前を通りすぎながらどれもこれもわざとらしい、かさかさした無用な芸術だという印象を受け、ヴェネチアの宮殿や、それどころか海辺の質素な家に吹く風や太陽の光でさえこれよりずっとましだと考えた。ようやくフェルメールの前に来た。彼の記憶ではもっと派手で、彼の知っているあらゆるものとかけ離れているはずだったが、それでも批評家の文章のおかげで彼は初めて青い小さな人物たちに気づき、砂がばら色であることを認め、最後にちょっぴり顔を出している黄色い壁の貴重なマチエールを発見した。彼の目まいは徐々に増大した。彼は目をすえて、ちょうど子供が黄色い蝶をとらえようと目をこらすように、この貴重な小さな壁を眺めた。『こんなふうに書かなくちゃいけなかったんだ』と彼はつぶやいた。『おれの最近の作品はみんなかさかさしすぎている。この小さな黄色い壁のように絵具をいくつも積み上げて、文章（フレーズ）そのものに価値を与えなければいけなかったんだ』しかしながら、目まいのひどさは彼の心をとらえて離さなかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com